

ゆくかはのながれ「ぼうせんちゆうしやくぷりん」と

次の()内の挿入注釈を参考に、ノートに書写した本文に傍線注釈をしなさい。仮名書きを常用漢字に直すこと。()内は傍線注釈では挿入として記すことになる。挿入注釈は必ず書くこと。また、「≧」には自分で考えた挿入句を入れること。
太字の語の文法的説明を本文の左側に書く。(なぜそう判断できるのか理由も書く。)
担当に当たった人は、授業開始前に黒板に傍線注釈をノートから写し、下段にある問に答えられるように準備しておくこと。

①ゆく川の流れは絶えずして、しかも、(そのながれをつくっているみずはこつこくとかわつて) もとの水にあらず。

①「ずして」と同じ意味の一単語は？

②よどみに浮かぶうたかたは、(つねにそこにあるようにみえるが、よくみると) かつ消えかつ結びて、(≧ ≧が) 久しくとどまりた

②「かつ」の訳し方

③世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

③「かくのごと」くどうなのか？

④たましきの都の内に、棟を並べ、豊(の ≧ ≧)を争へる、高き、いやしき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、

⑤これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。

⑥あるいは去年焼けて今年作れり。⑦あるいは大家滅びて小家となる。

⑥「あるいは」の訳し方

⑧住む人(の ≧ ≧)もこれに同じ。⑨所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人二人なり。

⑧「これに同じ」どのように同じなのか？

⑩朝に死に、夕べに生まるる(ひとがいるというよのなかの) ならひ(は)、ただ水の泡にぞ似たりける。

⑪(わたしには) 知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。

⑫また(わたしには) 知らず、(むじようなこのよの) 仮の宿り、たがためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。

⑫「たがためにか」の「か」の結びはどのようなっているか？

⑬その、あるじとすみかと、無常を争ふ(かのようにほろびさつていく)さま、いはば朝顔の露に異ならず。

⑬「朝顔」「露」は何の比喩か？文中より見つけよ。

⑭あるいは露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。

⑭は何のたとえか？

⑮あるいは花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。

⑮は何のたとえか？

問一、鴨長明の無常観はどのようなものか。「都」を例にとって説明しなさい。

問二、兼好法師との大きな違いは何か？

絶えずして――もとの水にあらず。

ゆく川の流れば

絶えずして

もとの水にあらず。

棟を並べ、
薨を争へる、

④ たましきの都の内に、

棟を並べ、
薨を争へる、

⑨

知らず、

知らず、

また知らず、

⑬
その

$$\begin{array}{cc} (16) & (14) \\ (17) & (15) \end{array}$$

あるいは

あるいは

対句表現をまとめなさい。

